

8月5日 年間第18主日

コヘ 1:2, 2:21~23 コロ 3:1~11 ルカ 12:13~21

1. ルカ

この物語りは、もし聖書から切り離して語られるなら、富の公平な配分を願って人間の物欲を戒める一つの訓話のようなものになってしまいます。いつの時代にも、世界は富める者と貧しい者に二極化された社会的経済的構造と無縁ではありませんでした。主イエスを、このような差別と格差を排するために戦った革命家のように考える人たちがいます。しかし、そのように考える人は、使徒たちが伝えたキリストの福音を聞いていない人です。聖書のあのテキストこのテキストを、使徒たちが宣教した福音から切り離して、人間が考え出した各種の思想や主義のために利用することが大に行われているのです。

v.21 「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこの通りだ。」

“神の前に豊かになる”という表現が何を意味しているかは、使徒たちの宣教を聞かされている初代教会にとっては、自明なことでありました。“豊かな”とは、神がイエス・キリストにおいて私たちを愛して下さり、御子の血によって私たちを罪から贖い、神の国を受け継ぐ民としてくださったその憐れみと恵みを表現する言葉です。“憐れみ豊かな神”から、“限りなく豊かな恵み”を受けたキリスト者が、その受け継ぐ神の国が“どれほど豊かな栄光に輝いているかを悟る”ことこそ、“神の前に豊かになる”ということなのです(エフェ 2:4,7, 1:18)。このような希望を共有する共同体の存続のために、互いに助け合う“慈善の業”のことを“施し”と呼んでいます(II コリ 8:2-4)。このような教会の相互扶助の動機付けのために、使徒パウロは次のように言っています。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」(II コリ 8:9)

一部の人々による富の独占も、社会主義が目指す富の公平な配分も、使徒たちが宣教するキリストの福音にとっては直接関係のないことでした。なぜなら“神の前に豊かになる”と“ただ、神の国を求めなさい”が、そこでは同義語だったからです。罪と混沌と矛盾に満ちた人間の歴史のただ中に、神は御子を遣わして、その血によって教会を贖って御自分の民となさいました。

今朝の福音朗読でこのテキストを聞く会衆が、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解」(エフェ 3:18)して、“神の前に豊かになる”ことが出来ますように。

2. コロ

vv.3-4 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

洗礼を受けてキリスト者になるとは、そういうことです。私たちは「洗礼によってキリストと共に葬られ」(ロマ 6:4)、古い人を脱ぎ捨てました(v.9)。今や「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリス

トを着ている」(ガラ3:27)ので、神の国の相続人としての特権を等しく持っています。「ギリシア人とユダヤ人、…… 奴隷、自由な身分の者の区別はありません。」(v.11)

現代は、急速な宗教的無関心とキリスト教的文化の衰退の時代です。第二バチカン公会議が閉幕したその後、世界は深い教会的危機の時代に入りました。多数の司祭たちが教会を去り、新たな召命が長期にわたって欠乏するという事態が起こったのです。これはカトリックだけに限られた現象ではありません。

啓示の源泉が聖伝と聖書にあり、キリストの福音を使徒たちの証言を通して聞くということに公会議が目覚めたとき、それは正しいことでした。しかし、すでに久しく最前線で働く司祭たちも牧師たちも、神のキリストにおける啓示を使徒たちの証言から聞くという、神学的訓練から、無縁でありました。主日に説教をする司祭も牧師も、信者たちからは聖書の専門家のように思われていても、実際には全くの“素人”、“初心者”ばかりでありました。この事実を、私たちは受け入れるところから始めなければなりません。

今朝の朗読配分から、使徒たちの宣教を聞き取り、使徒たちが伝えるキリストの福音を理解するのは、あなたがた一人一人なのです。今や、神のことばの前では、教導職と信者は同じところに立っているのです。

3. コハ

コヘレトが“空しい”と言っているのは、“人間が太陽の下で知力を尽くし、苦勞した結果”のことです。私たち人間は、自らの能力でいかなる“救い”を創り出すことも出来ないのです。

神がイエス・キリストによって与えてくださった“救いの福音”は、その証人である使徒たち(使1:8)の宣教によって、私たちに伝えられています。私たちに出来ることは、この使徒たちの証言に基づいて、福音を受け入れ、救いを与えられ、その“秘められた計画”(エフェ3:3-7)を感謝のうちに承認することだけです。「聖伝と聖書とは、教会に託された神のことばの一つの聖なる委託物を形造っている。」(神の啓示に関する教義憲章 10)

私たちが聖伝に触れることの出来るいちばん身近なものは、主日ごとに使われる“ミサ典礼書”であり(その要点は「ともにささげるミサ[ミサ式次第 会衆用]」にまとめられています)、日本語で読める素晴らしい翻訳の“新共同訳聖書”は発行されて既に20年になります。「それは天にあるものではないから、…… 海のかなたにあるものでもないから ……」(申30:11-14)。

昔も今もそして将来も、教会は使徒たちの証言するキリストの福音に聞くことによって、神の教会となるという原点に、繰り返し立ち帰らねばならないのです。 ハレルヤ、アーメン。

8月12日 年間第19主日

知 18:6～9 ヘブ 11:1～19 ルカ 12:32～48

1. ルカ

v.32 「小さな群よ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」

使徒たちによる宣教を、現代の私たちは聖書から聞いています。その宣教の背後には復活のキリストがおられるのであり、やがて到来する神の国への待望が、何にも勝って第一の関心事となっています。もし人がキリストの復活を信じず、またキリストの終末の日の再臨と神の国の到来を信じないなら、換言すればニケア・コンスタンチノーブル信条の中の“死者の復活と来世の命を待ち望みます”という宣言を古代の迷信に過ぎないと思うなら、聖書からキリストの福音を聞くことは不可能です。

その昔ヤーウエがイスラエルの人々をエジプトの国から導き出された夜、ヤーウエは“寝ずの番”をされました(出 12:42)。そのように、初代教会はキリストの再臨を待つ信仰を“寝ずの番”になぞらえて理解したのでした。福音書に収められたイエスの言葉は、一人一人の信者にも、彼らの小さな共同体にも、そしてそれを教え導く指導者たちにも、信仰をそのように理解することを求めています。v.41は、恐らく初代教会において使徒ペトロが果たした役割の大きさを想起させますが、その役割は他の多くの指導者たちも共有しているものでありました(v.48)。

やがて到来する神の国への待望が、何にも勝って第一の関心事となっている、そのような共同体を維持するということが“施し”(v.33)の目的であったことを、現代のキリスト者は見落としてはなりません(II コリ 8,9章、申 15:1-11 参照)。

2. ヘブ

vv.1-2 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」

ここで「望んでいる事柄」「見えない事実」と言っているのは、やがて到来する神の国のことであることを、先ず第一に明確にしておかねばなりません。神の国は、神の救済史の目標であって、イスラエルの信仰が目指して来たものと同じであったというのが、初代教会の理解でした。ですから、教会の信仰と希望は、これを共有する「おびたしい証人の群に囲まれている」(12:1)のであり、イエス・キリストはその将来の完成者であります(12:2)。

キリストは、眠りについた人たちの初穂として死者の中から復活したのであり(I コリ 15:20)、すべてのキリスト者を終わりの日に復活させてくださる(ヨハ 6:54)と、使徒たちは宣教しました。そして、その信仰は父祖アブラハムにまで遡るものでありました(v.19)。

現代においても私たち人間は、その生涯の終わりとして必ずやって来るであろう老化、病、敗北と死、失

望と墓場から逃れることが出来ません。そして、その本質は神による断罪と裁きであって、まさに創造者である神から“不要な者”として見捨てられることです。「死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(ロマ7:24)。しかし、キリストの福音は、この事実以上にさらに確かな“罪の赦しと贖い”、“復活と永遠の命”を、信じる私たちに与えます。その独り子をお与えになったほどに世を愛された神が、私たちキリスト者の神であるということ、それが“キリストの福音”なのです。

ですから、教会の葬儀は、死者があたかも天国に直行したかのような作り話で、遺族や仲間たちを慰めるために行われるものではありません。そうではなくて「希望を持たない他の人々のように嘆き悲しまないために」(1テサ1:13)、信仰によって励まし合うためのものなのです。

3. 知

神の救済史への期待と、その完成である神の国への信仰を、私たち教会は聖伝と聖書を通して聞いています。福音は、信じて神に従う人々にとっては救いではありますが、使徒たちが伝えたのとは異なる解釈を主張する人々にとっては滅びとなります。

恐らく紀元前1世紀に、アレクサンドリアで書かれたと思われる“知恵の書”は、古くから伝えられて来た出エジプトの伝承を解釈して、神が裁かれたエジプトと、神が救われたイスラエルとを対比して描きました。一方では歴史上のイスラエルは“かたくなな民”(申9:6)であったと言われていますが、他方“知恵の書”はこれを神の約束に信頼する民として描くことによって、著者の時代のユダヤ人に救済史への期待と信仰を訴えたのでした。

現代の教会で、私たちが共に主日のミサをささげている共同体で、“死者の復活と来世の命を待ち望みます”という信仰が宣言されることの大切さを思いましょう。今朝、キリストが「小さな群よ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と語られるのを聞いている会衆は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。

8月19日 年間第20主日

エシ 38:4～10 ヘブ 12:1～4 ルカ 12:49～53

1. ルカ

v.46 「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」

神が顕現されるとき、その顕現に触れた人々の人生に火が投じられました。神の山ホレブでヤーウエがモーセに顕現されて以来、彼の生涯の歩みに火が投じられました。聖書の中には、そのような人々の物語りが満ちています。御子イエスが受肉して私たちの間に宿られた(ヨハ 1:14)ことによって、キリスト者の生涯の歩みにも火が投じられました。このかたが十字架につけられて死に、復活して私たちの義と聖と贖いとなられた(1コリ 1:30)からです。

v.51 「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。」

地上に平和な世界を実現することが、キリスト教の目標であるかのように、またそのようなことが可能であるかのように、考えている人々が一方に存在します。それに対して、新約聖書の中にも、キリスト教の歴史の中にも、火が投じられた歴史の中を歩んだ多くのキリスト者の苦悩と戦いの記録があって、真の平和は将来の神の国にこそあるという希望を証言しています。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」(黙 7:14) 「神が人と共に住み、…… 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」(黙 21:3-4)

vv.52-53 は、ミカ 7:6 からの引用ですが、それに続く ミカ 7:7 には、「しかし、わたしは主を仰ぎ、わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる」という信仰と希望が歌われています。

キリスト教の歴史は、キリストの十字架と復活によって火が投じられた歴史です。それは「更にまさった故郷」(ヘブ 11:16)、すなわち神の国の到来を待っている“地上の歴史”であります。

2. ヘブ

火が投じられた歴史の中を旅する教会には、偉大な大祭司、神の子イエスが与えられています。「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。」(4:15) ですから、教会は「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら」(v.2)、その定められている地上の歴史を忍耐強く走り抜かねばなりません(v.1)。歴史の教会にとっては、「氣力を失い疲れ果ててしまわないように」(v.3)、キリストの福音への「公に言い表している信仰をしっかりと保つ」(4:14)ことが大切です。それは代々の時代の教会に、使徒継承によって受け継がれて来ました。

3. エレ

ユダの王ヨヤキムの治世の初めに、預言者エレミヤは当時のエルサレム神殿への迷信的な信仰に反対する預言を語りました(7章、26章)。その治世の第4年に、バビロンの王ネブカドネツアルが攻め上って来て、ヨヤキムが彼に服従したとき、エレミヤは再び弟子のバルクを通して悔い改めを語らせましたが、王はこれに耳を貸しませんでした(36章)。3年後にヨヤキムがバビロンに背いたため、ネブカドネツアルがエルサレムに攻め上って来たとき、ヨヤキムは既に死んで3ヶ月を過ぎていたので、その後を継いで王となっていたヨヤキン(ヨヤキムの子)を捕らえ、多数の王族、一群の有力市民と共に捕囚として連れ去りました(598年)。これが第一回捕囚です。

バビロンの王はヨヤキンに代えて、21歳のゼデキヤを王にしました。この王はヨヤキムと異なりエレミヤに好意的でしたが、若年にして優柔不断で役人たちに逆らえませんでした(v.5)。やがて国内の好戦的な分子に煽られてゼデキヤはバビロンに反旗を翻しますが、ついに587年に南王国ユダは滅ぼされてしまいます。苦難に満ちた預言者エレミヤの生涯の中でも、ことにエルサレム陥落前後の頃の苦闘は筆舌に絶するものであったと思われます。

バビロンの王は、ゼデキヤの目の前でその王子たちを殺し、その上で、彼の両眼をつぶし、青銅の足枷をはめてバビロンに連れ去りました。その他の有力者やエルサレムの住民たちも捕囚とされました。

これが、エレミヤが預言者として召された当時の、神が火を投じられたユダの歴史です。彼は主の言葉で呼びかけました。「立ち帰れ、イスラエルよ(シューブ、イスラーエール)」(エレ4:1)。そして、それが無駄にはならず、神の救済史はその後も確実に前進していることを、列王記下は25:27以下で、歴代史下は36:22以下で描きました。

私たち現代のキリスト者も、「このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせ」(Iコリ11:26)ながら、キリストの十字架と復活によって火が投じられた歴史の中を、共に歩んで行くではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

8月26日 年間第21主日

イザ 66:18～21 ヘブ 12:5～13 ルカ 13:22～30

1. ルカ

v.24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言うておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」

新約聖書の中の各福音書が成立するまでには、このようなイエスの言葉や譬え話の多くは、断片的な口伝として語り継がれていたと考えられます。従って各福音書が同イエスの語録からの話を採用したときに、その理解や解釈に微妙な違いが生じました。今朝の朗読に対応するマタイのテキスト(マタ7:13-14,21-23)を読むと、それが分かります。そしてそれは決して困ったことではなくて、私たちのキリストの福音への理解を豊かにしてくれるのです。

この“狭い戸口”は、神の国に入る戸口です(マタイでは天の国)。この“狭い”という意味が何であるかを、初代教会の信者はかなり明確に理解したに違いありません。しかし、近代の多くの説教者や文学者から影響を受けた現代人は、これを大幅に変形して理解するようになりました。“狭い戸口”が、人間が地上に創り出す美しく立派で平和な社会への入り口のことだと、そう考えられたからです。

それでは反対に、何が“狭い戸口”から入ることにならないのか、聖書に注目しましょう。

ルカでは「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」(v.26)とあるものが、マタイでは更に強い言葉に言い換えられています。「主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか。」

人間が多くの辛苦を経て成し遂げた努力や功績や善き業が、自らの立身出世は言うに及ばず、地上に美しく立派で平和な社会を創り出すことを目指して来たということは、昔も今も変わりありません。それはイエスの時代にも、初代教会の時代にもあったことなのです。ただ、私たちキリストの血によって贖われ、罪を赦されて、神の国の約束と希望に生きる者となった聖なる者たちにとっては、それはいささかピントのずれた間違った入り口であると、今朝のテキストは指摘しているのです。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ3:23)

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためです。」(エフェ2:8-9)

2. ヘブ

v.6 「なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れるものを皆、鞭打たれるからである。」

神は何によって私たち聖なる者たちを鍛え、鞭打たれるのでしょうか。それは神のことばによってです。教会とは、ある一定の生活基準や風習によって集まっているグループ、すなわちカトリック的な文化に賛

同した改宗者たちの集団のことではありません。そうではなくて教会は、人間が神の福音、キリストの福音に聞くという一事によって、…… 神が聖伝と聖書を通して人間に語ってくださるということ、それ故に神が語ってくださることばを人間が聞くという一事によって、建てられ、導かれているものです。教会が常にこの出発点に立ち帰るために、神はその御言葉によって聖なる者たちを鍛え、鞭打たれるのです。

聖書を読むとき、私たちは自分がモーセやエリヤやそのほかの預言者になったかのような錯覚に陥ってはなりません。私たちは福音書を読んでも、自分がイエスになることは出来ませんし、使徒の一人になることもありません。私たちは、それらの神の人に啓示された神のことばを、彼らを通して聞くのです。ですから「教会は使徒や預言者という土台の上に建てられている」(エフェ 2:20)のであって、現代の信者にせよ教導職にせよ、「新しい啓示を受けない」(教会憲章 25)という前提を十分に理解して、聖書を読む必要があります。

3. イザ

第三イザヤの最後の部分に、恐らく第二神殿完成後のエズラ・ネヘミヤ時代に書き加えられたと思われるこの結語は、私たちに教会とは何か、狭い戸口から入って到達する神の国とはどのようなものであるかを、理解させてくれます。

救われた信者が本物のキリストの小羊であるかどうかを、そして本物の神の国の相続人であるかどうかを、このテキストは私たちが判断する基準を示していると言って良いでしょう。

v.20「彼らはあなたたちのすべての兄弟を“主への献げ物として”……連れて来る、と主は言われる。それは、イスラエルの子らが“献げ物を清い器に入れて”、主の神殿にもたらすのと同じである、と主は言われる。」

そこでは、人間が多くの辛苦を経て成し遂げた努力や功績や善き業を吹聴することが、最早何の意味も持っていないことを知って、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神」(II コリ 1:3)を賛美しようではありませんか。 ハレルヤ、アーメン。